



特集

国語力を高める 「読書」のあり方

「全国学力・学習状況調査」に見る読書指導の方向性

横浜国立大学教授 高木 たかぎ まさき

本年四月に「全国学力・学習状況調査」(以下、「全国学力調査」)が実施された。この背景には、簡単に言えば、文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」と「PISA」があった。前者はより教養主義的な国語力を、後者はより実用主義的な言語力を重視していた。次期「学習指導要領」も、これらの影響を強く受けることになる。

さてこの両者のうち、前者が「読書指導」の重要性を強調したことは周知の通り。しかし後者については「読解力」が話題となったため、「読書指導」との関係は見えにくい。だがそこにこそ、これからの「読書指導」を考えるうえで重要なヒントが隠されている。

そもそもこの「読解力」の原語は、「reading literacy」である。「reading」という概念は、普通「読解」と「読書」を区別しない。その意味で「PISA」が突き付けた「読解指導」の課題は、そのまま「読書指導」の課題ともみなせる。事実、「PISA」の背景にあった欧米の「reading」の指導では、読みの対象も多様(本、新聞、雑誌、図表、ホームページなど)で、読みのプロセス(精読だけでなく多様な読み方、選書に関わる表紙やタイトルの読み、読後の評価など)も丁寧に扱う。情報化社会における学習者の「読書生活」を見据えているのだ。

そういう目で「全国学力調査」を見直してみる。中学国語B問題「蜘蛛の糸」の問題では、一種の教養が問われている。読み方も精読よりは大概な読み、ただ理解するのでなく評価的な読みも求められている。「本の広告カード」問題は、選書に関わるポップが素材。「ロボット」調べの発表原稿の問題では、ホームページの読みや映像資料の扱いが問われた。また、同A問題では新聞などでよく目にするグラフの読みが出題された。

このように見てくると、「全国学力調査」は、単に新奇な問題が出題されたわけではなく、学習者が直面している情報化社会における「読書生活」を視野に入れた出題であったことがわかる。「読解と読書」「教科書教材と本」といった単純な二分法を脱し、子どもたちの「読書生活」に根ざした、あるいは「読書生活」をデザインしていく、そんな「読書指導」の進むべき方向性を「全国学力調査」は示唆しているのではないだろうか。

高木 まさき (たかぎ まさき)

横浜国立大学教育人間科学部教授

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会国語専門部会委員

元文部省教科書調査官